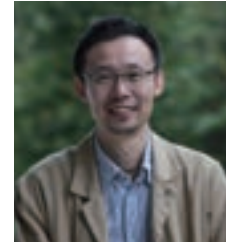


『アートキャンプ』 アートプロジェクトによる学び

押元 信幸

東京家政大学 造形表現学科

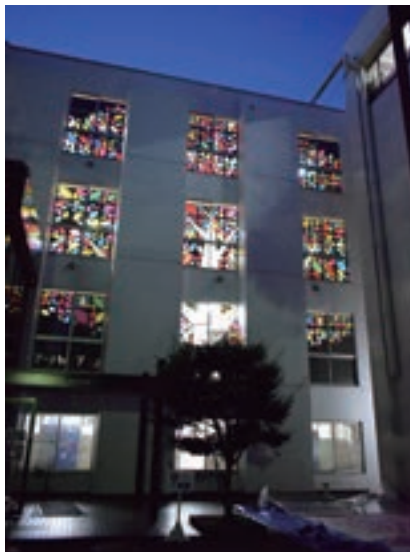


社会の変化とアートの変化

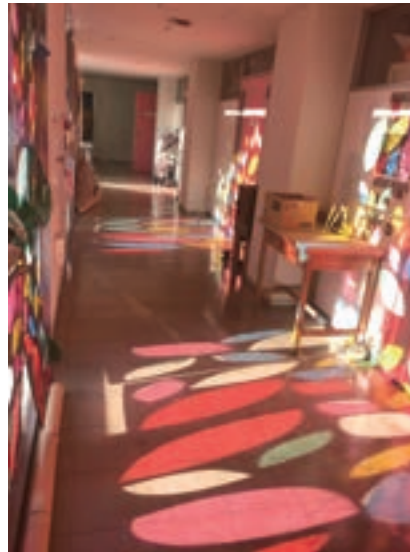
これからの大学教育について中央教育審議会（2012）は、教員と学生が相互的に学びあい知識を高めていく、学生主体型の能動的学修（アクティブ・ラーニング）の必要性を答申した。これまでの知識詰め込み型中心の教育から、学ぶ意味を学生に理解させた上で意思疎通を図りつつ行う学修への転換である。

また、アートにおいても転換が図られている。近年日本各地で盛んに行われているアートプロジェクトは、美術館やギャラリーから外に出て社会的な文脈でアートを捉える活動だ。そこでは「個」ではなく「関係性」に着目して人間とモノの関係、あるいは人間同士の関係を組み立て直す意図が垣間みえる。それまでの個人の視点で捉えられていた表現主体でビジュアル中心のアートを、環境や他者との関係から語り始めたといえる。社会や教育全般が、「モノ」から「教育」さらに「人」へと関心の軸が移行しているのだ。

本学科はこれまでに、学外での主体的な活動に対して単位化してきた。さらに多くの学生と教員が一緒になって切磋琢磨し、学生が主体的に問題を発見し解答を見出していく能動的学修のために、2012年度より大学内アートプロジェクトとしての「アートキャンプ」を開始し、今年で6回目を迎えた。



ウィンドーアート外から（本部）



ウィンドーアート内から（本部）



ステージでのサークル企画（本部）

大学内アートプロジェクトの目的

このプロジェクトの目的は三つ掲げられている。一つは「自主性, 企画力, コミュニケーション力の育成」、二つめに「社会におけるアートの役割の理解」、そして三つめが「自然との対話」である。授業で学んだ造形表現の専門性を社会に対応させる正答は、当然だがひとつだけで

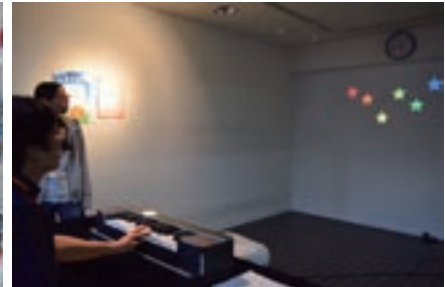
はない。教室という場を離れた新たな学びでは、他者を介した準備・調整で四苦八苦することが余儀なくされる。学生と教員はプロジェクト遂行のために、必要なコミュニケーション力を身につけていくしか方法はない。さらに、アートを身近に感じる体験型プログラムを立案し実践する過程で、学生自身のアート力が活性化されることにつながる。どちらにせよ当日の実践だけでなく、プロジェクトの目的達成に至るまでのプロセスが重要である。



鉄と遊ぶ (金工)



ライブペイント (4年)



体験型アニメーション



タイルづくり (陶芸)



パンケーキアート (本部)



風のせんたくもの (Hulip)



ライブペイント (絵画)



植物観察ツアー (環境教育学科)



キャンドル作り (しろくま)



フェルト作り体験 (織物)



マーブル染め (染色)



colorful tee pee tent (金工)



バルーンアート (児童学科 結城ゼミ)



新感覚プラネタリウム (映像)



和風喫茶やすらぎ (スペースデザイン)

アートキャンプの役割

アートキャンプは本学科の3年生が企画や運営の中心となり、授業ではできない様々なアートプログラムを立ち上げるプロジェクトだ（2018年は16のプログラム）。1・2年生は、まずは観客や運営スタッフとして段階的に関わっていく。学生はこうした活動を通じて、教員を始め各研究室のゼミ生である4年生、他学科の学生や教員、学内外の大人など多くの他者と関わりをもつことになる。こうして教室を飛び出し他者と関わることにより、社会におけるアートの役割を考えることになる。そして様々な局面で、知識の適切な利用、問題発見力、目標設定力、理論的思考力、プレゼンテーション力やコミュニケーション力が身につく。まさに造形分野のアクティブ・ラーニング（能動的学修）といえる。

また、造形活動としてのアートキャンプは、屋外空間での共同制作を中心にした協働的な活動である。それは個の枠組みを他者とのかかわりによって広げられることで、アートを捉え直す事を可能にする。また、自身のアートの表現とは違う視点によってアートを捉えることは、造形表現の豊かさや魅力に気づき、自分のアートを開いていく機会になっている。

模索するアートキャンプ

アートプロジェクトとして社会に開かれていくアートは、必然的に社会や教育にかかわりをもつことによって、変化を余儀なくされる。しかし、すべてが同じ方向を目指して変化できるとは限らない。なぜなら、そこにかかわった人はそれぞれの立場で主体的にプロジェクトに協働していくからだ。例えば、アーティストは自分自身の求める芸術的価値を求め、社会や教育は、明確な目的のもとでより多くの人にプロジェクトの社会的価値を求めたいと思うだろう。そのことでプロジェクトの方向に相反する意見が生ずることは瞭かである。そして、そのまま平行線のままで、プロジェクトは立ちゆかなくなることもある。

アーティストにとってアートは、如何なる状況においても新しいアートのあり方を見出していくものであり、言葉に表せない根源的なリアリティーに向かって突き動かされている。アートキャンプでは多くのワークショップが行われているのも特徴の一つだが、技術を極めたその先にみえる何かを求めているわけではない。しかし、単なるアウトリーチかというところでもない。では、いったいなぜアートプロジェクトでワークショップなのだろうか。

現代の学校の現場では、地域の中で大人と子どもたちをつなぎ、学校支援を行いながら地域と教育力を再生していくことのできる人材が求められている。同じように、アートプロジェクトやワークショップを実施する側に求められるのは、アートを他者と共有する姿勢や、コミュニケーションとしてのアートの実践であったり、自分自身のアート活動を他者とともに楽しみあい、ともに認めあい、学びあう姿勢なのだろう。

アートプロジェクトが目指しているのは、他者と協働する「おもしろいこと」の中で、自分自身の内側からわき起こってくる「知りたい」、「学びたい」、「つくりたい」という根源的な能動性を回復することかもしれない。その「おもしろいこと」に目覚める場をアートキャンプは模索し続けるのである。

※写真はすべてアートキャンプ2018のプログラムの様子。